

松山洋平著

『イスラーム神学』

作品社、二〇一六年

地田 徹朗



本書は、「正統」スンナ派ムスリムの立場から、「異端」とされる諸派を区別しつつ、「正統」だとされるイスラーム神学（思想潮流）の内容について解説した本格的な研究書である。同時に、日本のスンナ派ムスリムである筆者がイスラーム神学をどのように措定しているのかについて、いわば一次資料として本書を読むこともできる。イスラーム神学の諸学派が「正統」であるか「異端」であるかは筆者自身の信仰に基づいていると考えられるため、非ムスリムが本書を読む上でこの点を意識しておく必要があるだろう。

本書は二部構成である。第一部「スンナ派概論」は、「正統」かつ「主流」なスンナ派の神学的潮流についての概説である。冒頭で、スンナ派の「正統」な神学的潮流としてアシユアリー学派、マートウテイリー学派、「ハデーイスの徒」の三つを区別し、第一章では、これらスンナ派各神学派の共通事項について紹介し、その後は各学派の成立背景や相互認識、イスラーム法学諸派との関係性について解説されている。本書では、サウジアラビアで主流のワッハブ派や中東地域で武装闘争を繰り返す「イスラーム国」の思想的潮流へと結びつく「ハデーイスの徒」を前者二派と同等の比重で解説しており、それが本書の大きな学術的貢献だと言える。第二章では、「異端」の諸派としてシーア派を含む五つの神学的潮流について、前述のスンナ派神学の「正統」三学派との違いという観点からまとめられている。

第二部「スンナ派の信条——ナサフィー『信条』訳解」では、恐らくは二二世紀前半に書かれ、今日までスンナ派世界で読みつがれている神学要諦である、ナサフィー著『信条』について紹介されている。第三章は、この『信条』の本文訳である。第四章は、九ページ程度の本文訳に対して二七九ページにも及ぶ膨大な訳解である。『信条』に記されている各文章を二〇の要素（世界、アッラー、人間の行為、死後の出来事など）に分け、スンナ派「正統」神学の三学派による各要素の理解の相違を踏まえながら解説されている。筆者が指摘しているように、これでスンナ派「正統」神学の全容が分かるわけではないが、そこでなされてきた議論のエッセンスの多くが収められている。そして、読者は関心のある事柄について選んで読むことができる構成となっているのも便利だ。

そして、附録として収められている「ムスリム・マイノリティのためのイスラーム法学と神学」と題された論考は非常に興味深い。「非ムスリム諸国」におけるホスト社会やムスリムによる信仰のあり方を、イスラーム法学や神学の内容とどのように整合させるのかという議論やファトワーに基づく可能な実践について説明されている。それによると、日本のような国に住むムスリムは、アッラーを信仰し、正しいイスラームの教説について学習している限りにおいて、多くの義務が免責され、それは許容されるという。これはスンナ派イスラームのある種の柔軟性を示すものと考えられるが、同時に、このような理解がイスラーム世界のムスリム識者の間でどの程度の合意事項となっているのが気になるところである。

本書を通じて、スンナ派イスラーム「主流派」の神学上・信仰上のロジックを知り得るという意味で、本書は、イスラーム諸国、そこに住む人々、そして日本のスンナ派ムスリムたちとしか「共生」してゆくのかを考える上で、極めて実践的な知を我々にもたらしてくれると言える。本書は、帯で「日本で、唯一の『イスラーム神学』本格的入門書」と謳われているが、イスラームについての基礎的な知識なしに本書の内容を理解するのは容易でない。本書の筆者による新刊『イスラーム思想を読みとく』（ちくま新書、二〇一七年）が、より「入門」的な書物となるであろう。